

トマス・ウォートンの『ドイツ牧歌集』

海老澤 豊

牧歌はテオクリトス(Theocritus, 3C BC)の『牧歌』(*Idylls*, c. 270 BC)やウェルギリウス(Publius Vergilius Maro, 70-19 BC)の『牧歌』(*Eclogues*, 42-37 BC)などを模範とする長い伝統を持つが、十八世紀の英国においてさまざまな変容を遂げた。(1) 簡潔にその歴史をひもとくと、1709年に出版されたドライデン・トンソン編の『詩選集第六巻』(*Poetical Miscellanies: the Sixth Part*)には、アンブローズ・フィリップス(Ambrose Philips, 1674-1749)の『牧歌』(*Pastorals*)が冒頭に、アレキサンダー・ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)の『牧歌』(*Pastorals*)が巻末に、それぞれ掲載された。(2) ポープの牧歌が古典的な伝統に準拠して黄金時代の再生を目指す一方で、フィリップスは英国の自然や風俗をふんだんに取り入れて、新たな英国風牧歌を作り上げた。この相違が原因となり、当時の文人たちはポープ派とフィリップス派に分かれて論争を繰り広げることになった。ポープの盟友ジョン・ゲイ(John Gay, 1685-1732)はフィリップスの牧歌をもじって『羊飼いの一週間』(*The Shepherd's Week*, 1714)を書き、英国の田園を舞台に粗野で卑猥な羊飼いたちの姿を滑稽に描き出した。(3)

これ以降、詩人たちは舞台を田園からさまざまな場所に移すことで、ともすれば古典作品の安易な模倣に堕しがちな牧歌の可能性を広げた。まずヤコポ・サンナザロ(Jacopo Sannazaro, 1456-1530)の『漁夫の牧歌』(*Piscatory Eclogues*, 1526)とフィニアス・フレッチャー(Phineas Fletcher, 1582-1650)の『漁夫の牧歌』(*Piscatorie Eclogues*, 1633)に倣い、舞台を田園から海辺や河畔に、語り手を羊飼いや漁師や釣り人に転じた牧歌がある。ウィリアム・ダイパー(William Diaper, 1785-1717)の『水の精たち、すなわち海の牧歌』(*Nereides: or, Sea-Eclogues*, 1712)およびモーゼズ・ブラウン(Moses Browne, 1704-87)の『漁夫の牧歌』(*Piscatory Eclogues*, 1729)がその代表作である。(4)

また作品の舞台を田園から都会に移し、羊飼いに見立てた上流階級の人々を諷刺

する「都会風牧歌」も現われた。ジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift, 1667-1745)やゲイに数篇の例があり、モンタギュー夫人(Lady Mary Wortley Montague, 1689-1762)の『六篇の街の牧歌』(*Six Town Eclogues*, 1747)が最も有名である。(5)

さらに牧歌の舞台を異国の地に設定する詩人もいて、ウィリアム・コリンズ(William Collins, 1728-59)の『ペルシア牧歌集』(*Persian Eclogues*, 1742)を皮切りとして、トマス・チャタトン(Thomas Chatterton, 1752-70)のアフリカを舞台にした三篇の牧歌や、エドワード・ラシュトン(Edward Rushton, 1756-1814)の『西インド諸島の牧歌』(*West-Indian Eclogues*, 1787)などがある。(6)

本稿で論じる、トマス・ウォートン(Thomas Warton, 1728-90)の『五篇の田園牧歌、その舞台はドイツにおける戦争に圧迫される羊飼いたちの中にあると仮定される』(*Five Pastoral Eclogues: The Scenes of which are Suppos'd to lie among the SHEPHERDS, oppress'd by the War in Germany*)も最後の区分に属する。副題に示されているように、この牧歌は兵士の進軍や砲撃に曝されて戦場と化したドイツ(地理的な設定はきわめて曖昧である)の田園を舞台にしているため、『ドイツ牧歌集』(*German Eclogues*)と呼称されることが多く、本稿ではこの名辞を主として用いる。

(1) 『ドイツ牧歌集』の成立

本作品は1745年にドヅリーから匿名で出版されたために、多くの論者からウォートンが作者である信憑性について疑念が表明され、1777年の『詩集』(*Poems. A New Edition*), 1791年の『さまざま主題に関する詩集』(*The Poems on Various Subjects*), 1802年にマントが編集した定番の『トマス・ウォートン詩集』(*The Poetical Works of the late Thomas Warton*)のいずれにも収められていない。だがドヅリーを継いでパーチが編纂した1768年の『詩選集』(*A Collection of Poems*)第二巻に匿名のまま作品だけが採録された。さらにチャマーズ編纂による1810年の『英国詩人全集』(*The Works of the English Poets*)で、ようやくウォートンの作品として序文やエピグラフをつけた完全な形で掲載された。(7) しかしその後のウォートン詩集からは再び削除されている。

このように些細な出版事情にあえて触れるのは、成長後のウォートンがこの作品を若書きの駄作として闇に葬りたかったのではないかと思われるふしがあるからだ。

ウォートンが『ドイツ牧歌集』を出版したのは十七歳（しばしば十八歳と記述される）の時であり、三年前に公刊されたコリンズの『ペルシア牧歌集』に示唆を受けて、一気呵成に書かれたであろうことは容易に想像できる。またウォートンは1782年に桂冠詩人に任じられ、以降の詩集の表紙には名誉ある称号がはっきりと記されている。必ずしも傑作とは言えない『ドイツ牧歌集』を桂冠詩人の作品集に収めるには不適切だと判断しても不思議ではない。

トマスの兄ジョウゼフ (Joseph Warton, 1722-1800) は、1756年に発表した『ポープの作品と詩才に関するエッセイ』 (*An Essay on the Writings and Genius of Pope*) 初版で、ウェルギリウスの『牧歌』に触れて「田園生活の静けさに及ぼす戦争の影響は、第一牧歌の主題に新奇さと興味をもたらしている」と述べ、脚注で次のように記している。(8)

私は最近たまたま、この案に基づいて書かれ、先の戦争の間にドイツの羊飼いたちが痛感したであろう戦禍を描いた「五篇の牧歌」を熟読して大いに愉しんだ。そこには新たな状況での田園の苦難と、穏やかなイメージが満ちあふれている。著者の名前を知ることにはできない。

ジョウゼフは著者の名前が分からないとうそぶいているが、1745年に出版者ドズリーがトマスに宛てた書簡には「牧歌の一篇をあなたに最後の便で送るつもりでしたが、失念したことをお詫びします。正確に、あなたの心に叶うように印刷されることを望みます」とあり、余白にはジョウゼフと思われる筆で「これはドイツ牧歌であった」と記されているという。(9)

現在でも定番となっている1802年版詩集を編んだマントは、序文で『ドイツ牧歌集』がパーチの『詩選集』に掲載されたことに触れ、「しかし私はこれまでこの作品にウォートンの名前が添えられた例を知らず、彼の妹の証言として断言できるが、彼は著者であることを明確に否認していた」と述べている。(10) だが妹のジェインが保管していた、ジョウゼフの1790年頃の書簡には、「ウォートン氏の最初の作品は『憂鬱の楽しみ』ではなく、実に異常なことであり、本人は決して認めないでしょうが、『ドイツ牧歌集』でした」と記されているという。(11) このように家族で口裏を合わせていたとすれば、トマスが長じて後には『ドイツ牧歌集』を自作と認めなかったことは明らかであろう。

ドレイクは1810年にマントの証言を引きながら、「しかし、この牧歌集を通じて流

れる描写の傾向は、ウォートン氏が後にしばしば耽溺するようになった描写と、よく似ていることは否定できない」と述べて、第三牧歌の騎士道の争いと第四牧歌の修道院の描写をあげている。つまり後の作品で十全に展開されるトマスの中世趣味が、『ドイツ牧歌集』にも見られると指摘している。さらにドレイクは第二牧歌と第五牧歌の「隠者の庵」などにミルトンの影響を認め、これも『ドイツ牧歌集』がトマスの手になる証拠だとしている。(12)

キャンベルは「ドイツ牧歌集が年少時の詩として彼の信用を落とすことはないが、チャマー氏の『英国詩人全集』に収められた他の詩に追加して読者に提供したのは余計であった」と腐している。一方サウジーは『ドイツ牧歌集』が『英国詩人全集』に収められたことを「価値のある追加」と述べ、「十八歳の青年としては確かに注目すべき作物である」と褒めている。(13)

だが『ドイツ牧歌集』はトマスが初めて世に問うた野心作であったことが序文から読み取れる。牧歌は誰にでも簡単に書ける「陳腐で粗野な」類の詩歌であると一般に思われている。この作品はウェルギリウスの第一および第九牧歌と同じ性質を備えているが、「まったく新しい創案」に基いて書かれたものである。また自然や田園生活を描く牧歌が、「流行を追う装飾的な生活」(the fashionable ornaments of life)に精通した都会の紳士たちの「洗練された趣味」(the polite taste)に合うかどうか疑問だが、現在最も一般的な話題である戦争について語るならば、「この洗練されていない作品」(this unpoliteness)も許されるであろう。著者は「古代人の簡素」を模倣するように努めたが、これは簡素があらゆる詩歌の「真の装飾」(the true ornament)であると考えからである。さらに平和な田園生活とは対極にある、戦争の混乱した情景や、そこから生じるさまざまな感情は、「最も優雅な作家が詩才を發揮する上で決して不適切な題材ではない」とトマスは結論づける(イタリックは論者による)。

トマスは牧歌がすでに使い古されたジャンルの詩歌であることを認めながら、自作の文体と主題について高らかに主張する。まず現代は「洗練された趣味」が支配的になっているが、詩歌の本質は「簡素」に他ならない。『ドイツ牧歌集』は「洗練されていない」が、それは古代人の「簡素」を模倣した結果なのである。トマスは「洗練」と「簡素」を対立する概念として掲げるが、これは兄ジョウゼフが1753年に雑誌『ワールド』第26号で説いた「簡素のすすめ」を思い起こさせる。ジョウゼフは「簡素」は自然と最も接近しているために、あらゆる芸術作品において最高の美質であると規定する。だが現代では絵画、建築、音楽、文学、感情、服飾の分野

において装飾が過多になる傾向（これが「洗練」である）がはなはだしく、そのために「簡素」が蔑ろにされているとジョウゼフは嘆き、「簡素」の復権を訴えている。

(14)

また序文の下書きでトマスは、「著者は、現代の作家には頭でっかちの奇想や風変わりな表現が多すぎると考え、古代の作家たちに見られる気高い簡素を模倣しようと努力した。現代の作家はその種の作品で大いに成功を収めてきたが、英国の詩歌の趣味は修正が始まっている」と記しているという。(15) 最後の文言は、ジョウゼフが1746年に発表した『さまざまな主題に関するオード集』(*Odes on Various Subjects*)の広告で、ポープに代表される教訓詩や倫理的な主題に関するエッセイを退け、創意と想像力から生み出されたオードこそが「詩歌を正しい水脈に戻す企て」であると主張しているのと異口同音であろう。(16)

トマスは序文で『ドイツ牧歌集』が「まったく新しい創案」に基づいて書かれたと自画自賛しているが、これは本来平和で豊かな自然に満ちた田園を舞台にする牧歌に、戦争の災厄という正反対の要素を取り入れたことを意味する。トマスの言う「現在最も一般的な話題である戦争」とは、ヨーロッパ各国の利害が衝突し、英国も参戦したオーストリア継承戦争を指す。トマスはウェルギリウスの第一および第九牧歌を典拠として、エピグラフとして第一牧歌からの引用を掲げている。該当箇所をドライデンの英訳で示す。(17)

Did we for these Barbarians plant and sow,
On these, on these, our happy Fields bestow?
Good Heav'n what dire Effects from Civil Discord flow! (ll. 97-8)

この野蛮人のために木を植え、種を撒いたのか、
こやつらに我らの幸福な畑を与えるのか。
ああ、どんなひどい結果が国の不和からあふれるか。

この詩行の背景には、前42年のピリッピの戦いで勝利を収めたオクタウィアヌスとアントニウスが、功労者である退役軍人に報い、また彼らに定住を促すために、クレモナやマントヴァで農民から没収した土地を配分したという事実がある。(18) 第一牧歌の語り手であるメリボエウスは、十分に耕した農地を「野蛮人」に没収され、行くあてもなく故郷を去らざるを得ない。第九牧歌でも退役した兵士に土地を

奪われたモエリスが、新しい主人に命じられて、かつて自分のものだった子山羊を街に売りに行く。いずれも戦後の悪政に翻弄される羊飼いの哀れな境遇を描いたものである。

ただしジョーンズは、コリンズの『ペルシア牧歌集』の第四牧歌を「戦争の牧歌」(war eclogue)の端緒となった作品にあげ、「混乱と災厄を牧歌に導入することで、コリンズは平和や静けさや簡素という牧歌の慣習的な概念に別れを告げている」と述べて、トマスの『ドイツ牧歌集』は明らかにこの影響を受けたものだと指摘する。(19) コリンズは第四牧歌で、タタール人の進攻を受け、すべてを捨てて荒涼たる山の中に逃げ込むサーカシアの羊飼いの兄弟を描いている。(20)

Yon Citron Grove, whence first in Fear we came,
Droops its fair Honours to the conqu'ring Flame:
Far fly the Swains, like us, in deep Despair,
And leave to ruffian Bands their fleecy Care. (ll. 27-30)

最初に恐れて我らが逃れた、あのシトロンの森は、
美しい栄誉をうなだれ、征服する炎に屈している。
羊飼いらは、我ら同様、深く絶望して逃走し、
悪党どもに自分たちの羊たちを残していく。

トマスの『ドイツ牧歌集』が、土地を没収された羊飼いが嘆くウェルギリウスの牧歌よりも、戦禍に晒されて逃げ惑う羊飼いを描いたコリンズの牧歌に近いことは確かである。これは黄金時代を思わせる平和で豊かな田園が崩壊することに他ならず、牧歌の変質が始まっていることを物語っている。

(2) 蹂躪される羊飼いたち

五篇から構成される『ドイツ牧歌集』の内容を詳説する。まず牧歌の形式として、第三牧歌のみが羊飼いやアルコンの独白になっており、他の四篇はすべて二人の羊飼いの対話になっている。ただし作品の設定が平時ではないために、牧歌で通例取り上げられる歌合戦はひとつもない。またポーブやコリンズの牧歌のように、時や場所が明示されているわけではなく、第一牧歌の「モルダウ河」と第四牧歌の「ライ

ン河」を例外として、作品の中で特定の地名が歌われることもない。羊飼いや恋人の名前は、題名とは裏腹にギリシア・ラテン風の響きを持つ。さらにトマスは『ドイツ牧歌集』の文体にブランク・ヴァースを採用しているが、他の詩人がヒロイック・カプレットで牧歌を書いていることを思えば、きわめて異例なことと言えよう。

第一牧歌では、九日前にモルダウ河の氾濫で羊を小屋ごと失ったリュカスが、唯一残った子羊も兵士の馬に踏みしだかれて死んだことを嘆く。

Alas! each object that I view around
Recalls my perish'd darling to my sight,
And mocks me with his loss! see there the spring
Where oft he wont to slake his eager thirst!
And there the beech, beneath whose breezy shade
He lov'd to lie, close covert from the sun!
See yet the bark smooth-worn and bare remains,
Where oft the youngling rubb'd his tender side! (ll. 98-105)

ああ、周囲に見えるものすべてが
死んだ子羊を私の目に呼び起こし、
その損失で私を嘲るのだ。あそこの泉を見よ、
彼がいつも渴いた喉を癒していた泉だ。
あちらのブナ、あの風通しの良い木蔭で
彼は太陽から隠れて寝るのを好んだ。
見よ、樹皮がきれいに剥けて、露出したままだ、
子羊が柔らかい脇腹を擦りつけていた所だ。

今は亡き子羊が生前に慣れ親しんでいた自然を目にしたリュカスは、あらためてその不在を確認して悲嘆に暮れる。平穏だった田園生活は二度の災いによって根本的に覆されてしまったのだ。モルダウ河の氾濫は「邪悪な精霊」(the wicked spirit, l. 48)が招いたものと説明されるが、天災の一種と見なして差し支えあるまい。だが子羊の死は軍隊の行進によって引き起こされた人災に他ならず、あらゆる希望を失ったリュカスは、争いのない「遠い野原や牧草地」(distant fields, and pastures, l. 115)を求めて、この地を去ることになる。

一方で、リュカスを慰めようとするアルフォンも、犬の吠える声に起こされて自らは逃げ延びたものの、住居とする洞穴を兵士たちに荒らされたばかりであった。

-The monsters as they past,
With dire confusion all the cavern fill'd;
Hurl'd to the ground my scrip, and beechen cup,
Dispers'd the shaggy skins that form my bed,
And o'er the trampled floor had scatter'd wide
A hoard of choicest chesnuts, which I cull'd
With nice-discerning care, and had design'd
A present to my beauteous Rosalinde. (ll. 86-93)

—怪物どもは通りすがりに
恐ろしい混乱で洞穴を満したのだ。
私の合切袋とブナで作った盃を地面に放り投げ、
寝床にしていた毛深い羊の皮を散乱させ、
踏みにじられた床には選り抜いて貯えた栗を
ひどく撒き散らした。それは私が注意を払い、
厳選して集めたもので、美しいロザリンドへ
贈物にしようと思っていたのだ。

「怪物ども」と呼ばれる兵士たちは、略奪を目的にしてアルフォンの洞穴に侵入したわけではなく、「通りすがり」に「混乱」を残していったにすぎない。しかし被害者の羊飼いにとっては、質素で安らかな生活を破壊され、贈物にするはずだった「栗」を台無しにされたために、恋人を他の男に奪われることになる。リュカスの悲惨な境遇に比べれば、アルフォンの置かれた立場はまだましであるかもしれない。ただし理不尽な暴力によって、罪もない羊飼いが生活を脅かされるばかりか、事によっては命さえも奪われかねない事態に陥ったことに変わりはない。

第二牧歌は、羊飼いのアシスとアルシオンが、戦闘が途切れた束の間の平安を享受し、森の奥深い洞穴で朝と夕暮れの風景を歌い合うという趣向になっている。

Behind the hills when sinks the western sun,

And falling dews breath fragrance thro' the air,
Refreshing every field with coolness mild:
Then let me walk the twilight meadows green,
Or breezy up-lands, near thick-branching elms,
While the still landscape soothes my soul to rest,
And every care subsides to calmest peace: (ll. 17-23)

連なる山々の背後に西方の太陽が沈み、
降りてきた夜露が芳香を宙に吐き出して、
野原を穏やかな涼しさと爽やかにする頃、
私に散歩させよ、薄明の緑なす草地や、
微風そよぐ高台、こんもり茂った楡の近くを、
静かな風景は私の魂をなだめて休息させ、
あらゆる心労は平穏な安らぎに鎮まる。

戦乱を一時離れた避難所で、夕べの自然と魂が調和した喜びをアルシオンは歌う。これは牧歌風の閑暇というよりもむしろ、コリンズやジョウゼフの「夕べに寄せるオード」(Ode to Evening)など十八世紀中葉に流行した「夜景詩」(Night-piece)を思わせる描写である。しかし満ち足りた静謐な時間も長くは続かず、刀剣を打ち鳴らす音や響きわたる怒号が近づいてくる。アルシオンが続いて歌うのは、労働を終えて妻子の待つ家に帰った草刈人の悲劇である。

When near approaching, all before he sees
His lowly cottage and the village 'round
Swept into ruin by the hand of war,
Dispers'd his children, and his much-lov'd wife,
No more to glad his breast with home felt-joys! (ll. 51-5)

近寄っていくと、彼が眼前に見たのは、
自分の粗末な小屋や村中が、戦の手に
一掃されて廃墟と化したさまで、
子供らは散り散りになり、最愛の妻が彼の心を

しみじみした喜びで喜ばせることはなかった。

これは歌の中で起きたことであるが、二人の羊飼いをやがて襲うであろう予言とも読むことができ、前半の平和な夕べの描写と対照をなしている。

第三牧歌では、兵士に恋人ルシッラを奪い去られたアルコンが嘆く。

A soldier stern-advancing on his steed,
Robb'd of his love, and tore the beauteous maid
With brutal hand from his contending arms,
Weeping in vain, and shrieking for his aid,
And frowning bore the precious prize away. (ll. 8-12)

馬に乗った兵士がいかめしく進み出て、
彼の恋人を奪い、競おうとする彼の腕から、
甲斐なくも泣き、彼の助けを求めて叫ぶ、
美しい乙女を、乱暴な手で引き裂くと、
眉をひそめて貴重な宝物を奪い去った。

アルコンはルシッラを取り戻すすべもなく、ひたすら絶望のあまりに、荒れ果てた森の中を真夜中にさまよい歩く。この森では大昔に美女を巡って二人の騎士が決闘を行い、敗死した騎士が亡霊となって現われ、虚ろな呻き声を上げるために、久しく人跡が途絶えていた。アルコンは亡霊が自分を手招きするような感じを受けながら、ルシッラの身の上に思いを馳せる。戦場の喇叭や轟音が響くなかで、彼女は辛い行進を強いられ、やがて「野蛮な主人」(savage lord, l. 57)に捨てられて、「寄る辺なく、行き先もなく、友もない地を」(Helpless and vagabond, the friendless earth, l. 62)をさまようことになる。まだしも彼女が目の前で死んだ方が良かったとアルコンは言う。

If in her native fields the hand of death
Had snatch'd her from my arms, I cou'd have born
The fatal shock with less-repining heart;
For then I could have had one parting kiss;

I cou'd have strewn her hearse with fairest flow'rs,
And paid the last sad office to my dear!— (ll. 81-6)

もし故郷の野原で死の手が私の腕から
彼女をつかみ去ったならば、私の心は死の衝撃に、
これほど不満を漏らさなかつたろう。
それならば、別れの口づけができたのに、
彼女の棺に美しい花々を撒き散らして、恋人への
最後の悲しい務めを果たせたであろうに。

「棺に美しい花々を撒き散らして」は牧歌風哀歌(pastoral elegy)にしばしば見られる表現であり、看取る者たちに囲まれ、自然と一体化する、田園における安らかな死すらも、戦争によって奪い去られてしまったことを示す。あらゆる希望を失ったアルコンは残忍な狼がうろつく森に横たわり、「誰も泣かず、埋められず、誰も知らぬ場所で」(Unwept, unburied, in a place unknown, l. 107)死ぬことを暗示して歌を終える。

第四牧歌は二人の羊飼いの対話で、九ヶ月ぶりに故郷へ帰還したフィランテスが、ライン河畔で大軍勢の進軍を目撃したことを報告し、一方のマイコンはフィランテスの留守中に起きた、兵士による修道院の破壊を物語る。トマスが唯一つけた注によれば、フィランテスが見た光景は「ライン河を渡るプリンス・チャールズ」であるという。これは1744年6月30日の夜半に、英国の友軍であるオーストリア軍を率いたチャールズ・アレキサンダー・オブ・ロレインが、フランス・バヴァリア軍に攻め込もうと、ライン河を越えたという事実を踏まえたものである。(21)

The banks promiscuous swarm'd with thronging troops,
These on the flood embarking, those appear'd
Crowding the adverse shore, already past.
All was confusion, all tumultuous din.
I trembled as I look'd, tho' far above,
And in one blaze their arms were blended bright
With the broad stream, while all the glist'ring scene
The morn illum'd, and in one splendor clad. (ll. 55-62)

兩岸は群れをなす軍勢が雑多に混み合っていた、
手前では船で河に乗り出す者が、奥では
既に渡り終えた者が反対側の岸に群れなした。
皆が混乱し、あらゆる轟音が混じりあった。
私は遙か上方にいたが、見て震えた、
彼らの武器はひとつの閃光となって、広い大河と
輝いて混じり、あらゆるまばゆい情景が
朝を彩り、ひとつの輝きをまとっていた。

この描写に関する限り、軍隊に対する嫌悪や憎しみはまったく感じられず、フィランテスの目を借りて、トマスが栄光に包まれた友軍の進攻に興奮している様子が浮かんでくる。前首相の息子ホレス・ウォルポールは、1744年6月29日付書簡で「プリンス・チャールズが八万人の兵士を率いてライン河を渡ったことは間違いない、どこか、どんな状況かは言えないが」と政府内部の情報として「吉報」を伝えている。(22) おそらくトマスもこの渡河を歓迎すべき朗報として受け取ったのであろう。それに対して、兵士の略奪や破壊を語るマイコンの口調には、彼らに対する強い非難と憤りが感じられる。

One night, when all was wrapt in darkness deep,
An armed troop on rage and rapine bent,
Pour'd o'er the fields and ravag'd all they met;
Nor did that sacred pile escape their arms,
Whose walls the murderous band to ruin swept,
And fill'd its caverns deep with armed throngs
Greedy of spoil, and snatch'd their treasures old
From their dark seats: the shrieking sisters fled
Dispers'd and naked thro' the fields and woods,
While sable night conceal'd their wand'ring steps. (ll. 73-82)

ある晩、すべてが深い闇に包まれていた時、
武装した軍勢が激情と略奪に駆られて、
野原に溢れ、出会うものすべてを荒らした。

聖なる建物も彼らの武器を逃れられず、
その壁は人殺しの一団にすっかり崩され、
深い地下室は戦利品に飢えた武装軍団で
いっぱいになり、暗い内部から古い宝物を
奪い去ったのだ。泣き叫ぶ修道女たちは、
散り散りに裸のまま、野原や森へと逃げ、
漆黒の夜が彼女たちの彷徨う足取りを隠した。

かくして一夜のうちに修道院は破壊の限りを尽くされて廃墟と化す。しかしマイコンは兵士の暴虐を忘れたかのごとく、目の前に横たわる無残な廃墟が、時を経た後にピクチャレスクな風景に生まれ変わるであろうと思いを馳せる。

“This seat to future ages will appear,
“Like that which stands fast by the piny rock;
“These silent walls with ivy shall be hung,
“And distant times shall view the sacred pile,
“Unknowing how it fell, with pious awe! (ll. 94-8)

この建物は未来の目に映るであろう、
松の茂る岩山の間近に立つ建物のように。
この物言わぬ壁には蔦が這い絡まって、
遠い時代は聖なる建物を眺めるであろう、
崩れた訳も知らず、敬虔な畏敬の目で。

第五牧歌では、すでに戦闘の舞台は別の場所に移った後であるが、コリンとカリスタンは戦争が田園に及ぼした数多の傷跡について語り合う。カリスタンが連れてくる子羊の母親は戦場から飛んできた矢によって斃れ、鳥や羊や牛や鳥の鳴き声も絶えて聞こえない。村が戦場と化した時に、コリンは鬱蒼たる森の中に隠れ、灯火が照らし出す幻影に怯え、風が吹くたびに身を震わせていた。カリスタンも同様に、荒地にある隠者の庵に逃げ込んで難を逃れるが、そこは外部で吹き荒れる戦乱の嵐とは無縁な、隠棲の喜びにあふれた場所であった。

The good old-man improv'd with converse high,
And in my breast enkindled virtue's love:
Nor seldom would his hospitable hand
Afford a short repast of berries cool,
Which o'er the wilds (his scanty food) he pluck'd: (ll. 83-7)

良き老人は高尚な会話によって私を改善し、
私の心には美德への愛が灯された。
彼のもてなし上手な手は、軽食として
冷たいベリーを何度も与えてくれた、
荒地で（彼の乏しい食料だ）彼が摘んだのだ。

庵に近い岩山の頂上には、手作りの「苔生した十字架」(moss-grown cross, l. 94)が立てられており、隠者の敬虔な祈りの対象となっている。この戦禍を逃れた質素な庵を、第四牧歌で「古い宝物」を略奪される修道院と対比させることもできるが、トマスにそのような意識があったかどうかは不明である。カリスタンは以前から隠者を見知っており、真昼の暑い時分に幾度か彼の庵に招かれたことがあるという。おそらく隠者は羊飼いにあって信仰上の導き手であるが、教会や修道院に属することなく、自然と共棲しながら、ひとり清貧な生活を送っているのであろう。

しかし庵を離れたカリスタンの目に映ったものは、戦争によって変わり果てた光景であり、コリンの表現を借りれば「死に満ちた破滅的な野原」(the fatal plain of death, l. 109)に他ならない。そこでは、

Grim ghosts are seen of men that there were slain,
Pointing their wounds and shrieking to their mates,
Still doom'd to haunt the fields on which they fell. (ll. 111-3)

殺された者たちのぞっとする亡霊が見えるようだ、
自分の傷口を指差して、仲間に金切り声を上げ、
自分たちが斃れた野原の地縛霊となる運命なのだ。

隠者が鎮魂の祈りを捧げることもないのであろうか、戦乱の犠牲者たちは浮かば

れることなく地上を彷徨う。カリスタンの連れていた子羊もまた「病気の頭をうな垂れて」(hangs his sickly head, l. 115)一刻も早い帰宅を主人に促す。戦争の傷跡は田園に深く刻み込まれ、回復する見込みも語られないまま『ドイツ牧歌集』は閉じられる。

(3) 『ドイツ牧歌集』の意義

これまで五篇の牧歌を仔細に検討してきたが、いずれも戦争の災禍を共通の主題にしていることは明白である。第一牧歌でリュカスは飼っていた羊を兵士の乗る馬に殺され、アルフォンは住んでいた洞穴を兵士に荒らされる。第二牧歌でアシスとアルシオンは束の間の平安を愉しむが、ふたたび戦乱に巻き込まれる不安は一向に解消されない。第三牧歌で兵士に恋人を拉致されたアルコンは、自暴自棄になって森の中で狼の餌食となることを選ぶ。第四牧歌でフィランテスが河を渡る大軍勢の壮観に目を見張る一方で、マイコンは修道院が兵士に略奪されて廃墟と化す経緯を語る。最後の第五牧歌でコリンは身を隠した森の中での恐怖を告白し、カリスタンは隠者に倫理的な感化を受けながらも、流れ矢で母親を失った子羊を抱えて狼狽する。

『ドイツ牧歌集』に関する近年の批評を二つ紹介しよう。ブラッグはウォートンの文体が「散文的すぎるか、ぎこちない構成のために損なわれている」と批判する一方で、『ドイツ牧歌集』の意義は「ブランク・ヴァース、憂鬱な雰囲気、亡霊の出没する森、自然描写におけるリアリズム」など「ロマン主義的な要素」にあると主張する。(23) またヴァンスは『ドイツ牧歌集』には間投詞が多すぎ、悲嘆や苦難の描写には感情があふれすぎていると指摘した後で、ウォートンは「平和な自然の光景や音を、混沌とした戦闘の光景や音と対比させ、読者の感情を戦争に影響を受けた者たちに巻き込みながら、視覚的でパノラマ風の背景を効果的に提示している」と一定の評価をする。(24) この二篇の批評は発表された時期がかなり離れているが、いずれもトマスの舞台設定や描写を長所に挙げていることが分かる。

一般に牧歌は真昼の野原を舞台にするのが決まりごとであるが、『ドイツ牧歌集』では夜の情景がしばしば取り上げられ、羊飼いが身を潜める場所も鬱蒼たる森である。これがトマスのゴシック趣味に起因することは間違いなく、第一牧歌の「荒れ果てた僧院の真暗な僧室」(the ruin'd abbey's darkest cell, l. 49)や、第四牧歌の廃墟となった修道院はきわめてゴシック的な装置である。同様に第一牧歌の「邪

悪な精霊」や、第三牧歌の決闘で命を落とした騎士の亡霊、第五牧歌の戦乱に巻き込まれて死んだ者たちの亡霊なども、従来の牧歌には登場しなかったものばかりである。戦乱で荒廃した風景や超自然の存在は、「ゴシック主義者」あるいは「中世主義者」トマスの美的嗜好に合致しているからこそ、ふんだんに導入されているのである。

『ドイツ牧歌集』のもうひとつの特異な点は、牧歌の一般的な詩形であるヒロイック・カプレットではなく、ブランク・ヴァースで書かれていることである。この二つの詩形はいずれも弱強五歩格という韻律を持つが、前者が二行ずつ（時に三行ずつ）押韻するのに対して、後者は無韻という違いがある。またヒロイック・カプレットが押韻の影響を受けて対句的な表現を好み、二行（時に三行）をひとつの意味単位とする一方、ブランク・ヴァースには意味上の単位において行数の制約はなく、そのために延々と描写を続けることが可能となる。ゴシック風の描写を好むトマスにとって、ブランク・ヴァースは格好の器となったのである。ヘイヴンズはトマスを「十八世紀におけるミルトン崇拜の司祭長」と呼ぶが、彼のブランク・ヴァース好みがミルトンから来ていることは言うまでもないであろう。(25)

このように素材と文体の双方において、トマスは『ドイツ牧歌集』において牧歌に新風を吹き込んだと言える。外的な抑圧によって苦悩する羊飼いと造形は、ウェルギリウスやコリンズに先例があるため、トマスが序文で高らかに宣言した「まったく新しい創案」という言葉は割引して考える必要がある。また作品自体も決して優れているとは言いがたい。ただしトマスの『ドイツ牧歌集』が、植民地支配に苦しむ黒人を主人公にしたチャタトンやラシュトンの牧歌を生む契機となったことは、おそらく間違いのないところであろう。

注

- (1) テオクリトスの『牧歌』については以下を参照。 *Greek Bucolic Poets*, trans. J. M. Edmonds (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1912), Theocritus, *The Idylls*, trans. Robert Wells (Harmondsworth: Penguin, 1988), テオクリトス『牧歌』古澤ゆう子訳（京都大学学術出版会, 2004）。ウェルギリウスの『牧歌』については以下を参照。 *Virgil, Eclogues Georgics Aeneid, 1-6*, trans. H. R. Fairclough (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1935), *Virgil, The Eclogues*, trans. Guy Lee (Harmondsworth: Penguin, 1980), *Virgil, The Eclogues・The Georgics*, trans.

- C. Day Lewis (Oxford: Oxford University Press, 1983), Virgil, *The Eclogues & Georgics*, ed. R. D. Williams (New York: St. Martin's Press, 1979), ウェルギリウス『牧歌・農耕詩』河津千代訳 (未来社, 1981), ウェルギリウス『牧歌／農耕詩』小川正廣訳 (京都大学学術出版会, 2004)。
- (2) *Poetical Miscellanies: the Six Part. Containing a Collection of Original Poems, with Several New Translations* (London: Jacob Tonson, 1709) 復刻版は *The Dryden-Tonson Miscellanies, 1684-1709*, eds. Stuart Gillespie & David Hopkins, 6 vols (London: Routledge, 2008)
- (3) Alexander Pope, *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, volume 1 of The Twickenham Edition of The Poems of Alexander Pope, eds. E. Audra & Aubrey Williams (London: Methuen, 1961), *The Poems of Ambrose Philips*, ed. M. G. Segar (Oxford: Basil Blackwell, 1937), John Gay, *Poetry and Prose*, eds. Vinton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1974)
- (4) *The Major Latin Poems of Jacopo Sannazaro*, trans. Ralph Nash (Detroit: Wayne University Press, 1996), Giles & Phineas Fletcher, *Poetical Works*, ed. Frederick S. Boas, 2 vols (Cambridge: Cambridge University Press, 1909), *The Complete Works of William Diaper*, ed. Dorothy Broughton (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1952), Moses Browne, *Poems on Various Subjects* (London: Edward Cave, 1739)
- (5) *The Poems of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams, second edition, 3 vols (Oxford: Clarendon Press, 1958), Lady Mary Wortley Montague, *Essays and Poems and Simplicity, a Comedy*, eds. Robert Halsband & Isobel Grundy (Oxford: Clarendon Press, 1993)
- (6) *The Works of William Collins*, eds. Richard Wendorf & Charles Ryskamp (Oxford: Clarendon Press, 1979), *The Complete Works of Thomas Chatterton*, eds. Donald S. Taylor & Benjamin B. Hoover, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1971), Thomas Rushton, *West-Indian Eclogues* (1787; ECCO, 2010)
- (7) Thomas Warton (anonymous), *Five Pastoral Eclogues: The Scenes of which are Suppos'd to lie among the Shepherds, oppress'd by the War in Germany* (London: R. Dodsley, 1745) 本論のテキスト。 *Poems. A New Edition, with Additions by Thomas Warton* (London: T. Becket, 1777), *The Poems on*

- Various Subjects of Thomas Warton, B. D.* (London: G. G. J. & J. Robinson, 1791), *The Poetical Works of the late Thomas Warton, B. D.*, ed. Richard Mant, 2 vols (Oxford: University Press, 1802), *A Collection of Poems in Two Volumes. by Several Hands* (London: G. Pearch, 1768) 2: 272-94., *The Works of the English Poets, from Chaucer to Cowper*, eds. Samuel Johnson & Alexander Chalmers, 21 vols (London: J. Johnson et al, 1810) 18: 136-41.
- (8) Joseph Warton, *An Essay on the Writings and Genius of Pope* (London: M. Cooper, 1756) 9-10. 第二版の *An Essay on the Genius and Writings of Pope* (London: R. & J. Dodsley, 1782) では、この記述が削除されていることも示唆的である。
- (9) *The Correspondence of Thomas Warton*, ed. David Fairer (Athens: The University of Georgia Press, 1995) 6.
- (10) Mant, 1: xiv. リナカーもマントの記述を鵜呑みにして、『ドイツ牧歌集』の著者がウォートンに帰せられたことは「おそらく誤りである」と述べている。Clarissa Rinaker, *Thomas Warton: A Biographical and Critical Study* (1916; New York: Johnson Reprints, 1967) 25.
- (11) Joan Pittock, “Lives and Letters: New Wartoniana,” *Durham University Journal* 70 (1978): 195.
- (12) Nathan Drake, *Essays, Biographical, Critical, and Historical, Illustrative of the Rambler, Adventurer, and Idler, and of the Various Periodical Papers*, 2 vols (London: J. Seeley et al, 1810) 2: 167-9.
- (13) Thomas Campbell, *An Essay on English Poetry; with Notices of the British Poets* (London: John Murray, 1848) 368., Robert Southey, “Chalmers’ English Poets,” *Quarterly Review* 11 (1814) 501.
- (14) *The World*, No. 26 (June the 28th, 1753) ed. Adam Fitz-Adam (London: R. & J. Dodsley, 1753) 155-9.
- (15) David Fairer, “Thomas Warton,” *Dictionary of Literary Biography, vol. 109, Eighteenth-Century British Poets, Second Series*, ed. John Sitter (Detroit: A Bruccoli Clark Layman Book, 1991) 273.
- (16) Joseph Warton, *Odes on Various Subjects*, Second Edition (London: R. Dodsley, 1747)
- (17) John Dryden, *The Works of Virgil in English 1697, vol. 5 of the California*

- Edition of the Works of John Dryden*, eds. William Frost & Vinton A. Dearing (Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1987) 77. なおジョウゼフもウエルギリウスの『牧歌』を英訳しており、同じ箇所を示すと「何と、この育ちゆく作物を野蛮人に分けねばならぬか、この十分耕した畑が戦争の戦利品となるのか、見よ、いかなる悲惨な不和に羊飼いが駆り立てられるか、見よ、どんな領主のために我らは豊かな穀物を広げるか」(What! must these rising crops barbarians share? / These well-till'd fields become the spoils of war? / See to what mis'ry discord drives the swain! / See, for what lords we spread the teeming grain!, ll. 89-92)となる。*The Works of Virgil. In Latin and English*, trans. Christopher Pitt & Joseph Warton, 4 vols (London: R. Dodsley, 1753) 1: 59.
- (18) Virgil, *The Eclogues & Georgics*, ed. R. D. Williams (New York: St. Martin's Press, 1979) 89. 第一および第九牧歌には、ウエルギリウス自身が土地を没収され、後に有力者の庇護を得て、これを回復したという事実も反映されている。
- (19) Richard F. Jones, "Eclogue Types in English Poetry of the Eighteenth Century," *JEGP* 24 (1925): 56.
- (20) William Collins, *Persian Eclogues. Written originally for the Entertainment of the Ladies of Tauris. And now first translated, &c* (1742; Oxford: Clarendon Press, 1925)
- (21) *Gentleman's Magazine* 14 (1744) 341-2.
- (22) *The Letters of Horace Walpole, Fourth Earl of Oxford*, ed. Mrs. Paget Toynbee, 16 vols (Oxford: Clarendon Press, 1903) 2: 32.
- (23) Marion K. Bragg, *The Formal Eclogue in Eighteenth-Century England* (Orono: Maine University Press, 1926) 81.
- (24) John A. Vance, *Joseph and Thomas Warton* (Boston: Twayne Publishers, 1983) 30.
- (25) Raymond Dexter Havens. *The Influence of Milton on English Poetry* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1922) 463.

この論文は駿河台大学平成22年度特別研究費の成果である。